九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『サザエさん』に見られる呼びかけ語

陣内, 正敬
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/4262

出版情報：言語文化論究. 1, pp.71-77, 1990-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

『サザエさん』に見られる呼びかけ語

陣　内　正　敬

0.　日本語教育教材としての『サザエさん』

ここ2年余り日本語AV教材としてテレビで放映されている『サザエさん』を使っている。日常の話しことばに関する教材としては数々の利点を持っており，それについては陣内（1987）で述べているのでここでは繰返さない。ただその中で特筆すべきは，敬語を含めた待遇表現やことばの男女差，世代差，職業差などの多様な日本語に具体的な場面を通して触れられるということである。『サザエさん』は日本語教材として見た場合，もし学習者に適度な日本語能力があれば（少なくとも中級以上），多様性に富んだ生きた日本語を学習する上で，また平均的日本人の生活習慣や考え方を理解する上でこの上ない材料を提供してくれるように思える。

‘待遇表現’はその表現の根本にある人間関係の認識様式を把握しておかなければ理解できないし使いこなせない。『サザエさん』にはサザエさんを始めとするイソノ家の面々や彼らを取り巻く多様な登場人物がおり，多様な場面で多様な会話がなされている。そこで用いられている待遇表現を通して日本人の対人意識を伺うことが可能となる。待遇表現は日本語の中でも外国人にとって理解しがたい部分が多く，一歩間違えば気分を害して円滑な会話が行われなくなるという微妙な問題を含んでいるだけに，学習者の側の十分な理解が必要となってくる。またそのためには教授する側も体系立った知識を持っていなければならない。

小論は以上のような主旨で書いたものであり，『サザエさん』に見られる待遇表現，その中でもとくに呼称の用法を分析し，それを通して日本人の対人意識をさぐると共に，日本語教育教材として教授する際の参考にもなるようにと考えた。

1.　呼称体系の記述

日本人社会に生活する者にとって，相手をどう呼ぶかということは言語生活の中でもとくに気をつかう部分である。「姓」で呼ぶか「名」で呼ぶか，「さん」づけするか「くん」づけするかなど，多種多様なレパートリーのなかからその場に応じて適切に使い分けなければならない。しかしながらこれにはかなり定まったルールが存在しており，これまでにそれについてのいくつかの分析もなされている。

まず鈴木（1973）にその先駆的かつ緻密な考察がある。次いで脚本を題材に取ったIshikawa et al.（1981），英語との比較という意味で久野（1977），鈴木（1982）パン（1982），男女差という観点から井出（1982），さらに敬称（－さん，－くん等）についてLoveday（1986）などが主なものである。

一方海外では欧米を中心にかなりの文献が見られ，呼称の社会言語学的研究の出発点となったBrown & Gilman（1960）を始め，呼称体系の記述にフローチャート図を導入したErvin-Tripp（1969），これまでの呼称に関する論を集大成したBrawn（1988）などが著名なものであろう。中でもErvin-Tripp（同上）のフローチャート図式は，ある呼称の選択がいかなる社会文化的要因によってなされるの

かを明示でき，またその要因間の重要度の違いもある程度示しうる便利なものである。またこの図式によって言語間の比較を行えば，待遇行動の比較対照というレベルへも拡げられる有益な記述方法と考えられる。小論でもこの図式を利用しようと思う。

ところで呼称と言われるものの中には，直接話し相手に呼びかける際に用いられる‘呼びかけ語’(terms of address)[注1]と，その人のことについて言及する際に用いられる‘言及語’(terms of reference)[注2]の2種類がある。日本語においては同一人物が同一人物を指す時でも，次の例のようにこの両者に違いの出る場合がある。

‘呼びかけ語’　／　‘言及語’
父さん，少しお金頂戴。
　　／父は学校の先生です。
太郎さん，今月分の給料は。
　　／主人は学校の先生です。
あなた，電話よ。
　　／山田は只今外出中です。

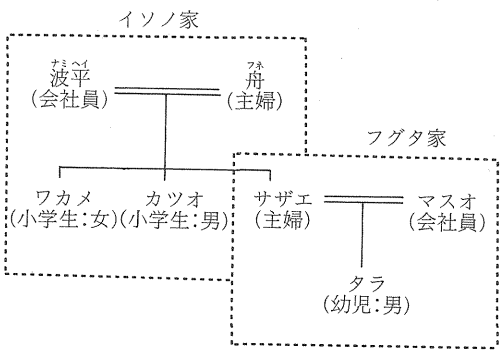
ただし小論では，‘呼びかけ語’の記述に留める。それはここでの分析材料となった『サザエさん』においては，語りの文がなく全て対話文であるためか呼びかけ語の出現が圧倒的に多く，逆に言及語の例が少ないこと，たまにあっても，呼びかけ語と同じであることなどが関わっている。また呼びかけ語の記述がなされれば，言及語についてもかなり類推が効くであろうし，呼称体系の記述の第1ステップとしては前者に限定した方が妥当と考えたからでもある。さらに同様の理由で「あなた」「お前」などの代名詞も除くこととし，結局次のような項目のみを扱うこととした。なお，記述の便宜上，それぞれに略号を与えており，以下はこの略号を用いる。

姓：LN (last name)
名：FN (first name)
親族名称：K (kinship terms)
肩書き，職階：T (titles)
さんづけ：－サン
くんづけ：－クン
ちゃんづけ：－チャン
呼び捨て：－ ϕ

2.『サザエさん』に見られる呼びかけ語

2.0.『サザエさん』の登場人物

『サザエさん』は東京の下町に住むサザエさん一家（正確にはイソノ家とフグタ家がひとつ屋根の下で暮らしている－下図参照）が繰り広げるユーモラスな話しである。各ストーリーには，それぞれに主人公が設定され，ほぼ一家のメンバーが交代でそれを務める。



〈サザエさん一家〉

これに近所に住んでいるナミノ家（ノリスケ：会社員で波平の甥に当たる，タイコ：妻，タラ：息子）が加わる。またサザエの夫マスオの職場仲間のアナゴや，カツオのクラスメート中島，花沢，かおりちゃんなども欠かせない存在である。

以下これら登場人物間に見られる呼びかけ語を検討して行くが，場面を，1．サザエさん

1)　鈴木（1973）の「呼格的用法」に当たる。
2)　鈴木（同上）の「代名詞的用法」に当たる。

一家，2．マスオ，ノリスケの職場の2つに分けて考える。記述の順序としてまず各場面ごとにメンバー間の呼びかけ語のリーグ戦式表を作り，若干の分析を経てErvin-Tripp流のフローチャート図にまとめたい。その際資料からだけでは言えないより一般的な呼びかけルールについても言及したい。なお分析の資料となったのは，昭和62年中に放映された『サザエさん』の中から恣意的に選んだ計20本のストーリーである。

2.1.　サザエさん一家

表1はサザエさん一家のメンバー相互の呼びかけ語である。

表1から次のことが読み取れる。

(1)　年上から年下に対して（点線部を除く表の右上半分）はFNである。ただし例外がいくつかある。まずマスオは波平，舟にとって義理の息子であるためか呼び捨てではなく，FNクン（波平→マスオ），FNサン（舟→マスオ）である。またマスオからカツオ，ワカメに対しても義理の弟妹ということで呼び捨てではなくFNクン（マスオ→カツオ），FNチャン（マスオ→ワカメ）である。つまり－サン，－クンを添えることよって一種の改まりが出される。さらにタラはまだ幼児であるため家族全員からFNチャンと呼ばれている。

(2)　年下から年上に対して（点線部を除く表の左下半分）は原則としてKサンである。ただし波平，舟に対してサザエ，カツオ，ワカメがオKサン～Kサンの両方可能なの対し，マスオは常にオKサンである。これは義理の親に対する改まり意識から来るものであろう。似たことはカツオ，ワカメがマスオを呼ぶ時にも見られ，いずれもFN Kさんと常にFNが入る。また前述のオKサン～Kサンの併用に関してある傾向が見られる。波平はオKサンの方が，舟はKサンの方が呼ばれる率が高い。伝統的気風のイソノ家では父親の方が（見かけ上）威厳をもっているのかも知れない。ただ呼ぶ側の年齢にもより，一般に成長するにつれてオKサンが減る様である。サザエは舟に対し同性ということも手伝ってかKサンのみ。タラ，ワカメはいずれも－チャンで呼んでいるが，この表を見る限りチャンづけは「幼児性」と関わっているようだ。

(3)　夫婦同士（表の2つの点線部）について，波平／舟とマスオ／サザエの間には同じ夫婦関係とはいいながら全く異なった型が見られる。前者では「お父さん」，「お母さん」などとKベースであるのに対し，後者ではFNベースである。これは波平／舟が子供達の立場に立った‘虚構的用法’（鈴木（1973：158））で呼び合っているのに対し，マスオ／サザエはそうではないことから来るものである。夫婦がKベースで呼び合うのはおそらく子供ができてからであろう。この点に関してタラはマスオ，サザエをパパ，ママと呼んでおり，その意味ではマスオ／サザエ間にこの呼称が現れてもよさそうだがまだ確かめていない。FNベースからKベースへ移る直前の状態かも知れない[注3)]。

(4)　敬称，愛称の用い方に関して，性差の反映する場合が見られる。

a．カツオくん（マスオ→カツオ）
　／ワカメちゃん（マスオ→ワカメ）
b．マスオくん（波　平→マスオ）
　／マスオさん（舟→マスオ）
c．サザエ（マスオ→サザエ）
　／マスオさん（サザエ→マスオ）

aの例はおそらく呼びかけられる側の性差に

3)　夫婦間に見られるFNベースからKベースへの変化のプロセスとして，まず子供に言う際に用いられる‘言及語’（例えば「それはお父さんに頼みなさい」）から始まり，次第に‘呼びかけ語’に広がって行くのではないかと考えている。

表1　サザエさん一家

呼びかける側＼呼びかけられる側	波　平	舟	マスオ	サザエ	カツオ	ワカメ	タ　ラ
波　平		母さん	マスオくん	サザエ	カツオ	ワカメ	タラちゃん
舟	お父さん 父さん		マスオさん	サザエ	カツオ	ワカメ	タラちゃん
マスオ	お父さん	お母さん		サザエ	カツオくん	ワカメちゃん	タラちゃん
サザエ	父さん お父さん	母さん	マスオさん		カツオ	ワカメ	タラちゃん
カツオ	お父さん 父さん	母さん お母さん	マスオ兄さん	姉さん		ワカメ	タラちゃん
ワカメ	お父さん 父さん	母さん お母さん	マスオ兄さん	お姉ちゃん お姉さん	お兄ちゃん		タラちゃん
タ　ラ	おじいちゃん	おばあちゃん	パ　パ	マ　マ	カツオ 兄ちゃん	ワカメ お姉ちゃん	

＊併用形がある場合は上段が頻度の高い形

よる違いであろう。一般に男の子に対しては，幼少期には－チャン，少年期には－クン，青年期からは－クンと－サンが共存する。一方女の子に対しては幼少期，少女期を通して－チャン，青年期以降は－サンが主流である。カツオとワカメはいずれも小学生であり，マスオの呼びかけはこの違いを反映していると見られる。これに対し，b，c はいずれも呼びかける側の性差が反映しているものと考えられる。b のマスオという同一人物に対する波平と舟の違いについてはさほど問題ないであろう。年上から年下に対する場合男性同士なら－クン，その他は－サンというのが一般的である。また c の妻（女性）から夫（男性）への呼びかけ方がその逆より丁寧なのが一般的であるが，これについては若干議論の余地もある[注4)]。

以上のことは次の 2 つにまとめられる。

1)　家族内においては年上に対してはKベース，それ以外は FN ベースで呼び合い，敬称，愛称の添えられ方には，性差，年齢差，さらには親疎感などが反映する。また夫婦間では，‘虚構的用法’ によりKベースになることが一般的である。

2)　家族内においては，夫婦間を除いて，呼びかけ語は非相互的（non-reciprocal）である。つまりKをもらう人はその与えた相手に対し決してKは使えず，FN を与える。逆に FN をもらう人は必ずその相手にKを与える。夫婦の場合は，両者同等と考えられているからであろうか相互的（reciprocal）FN，ないし ‘虚構的用法’ の場合は相互的Kとなる。

ここで図 1 にサザエさん一家の「呼びかけ語のシステム」をフローチャートで示す。

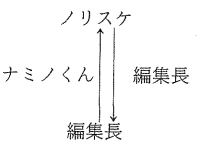


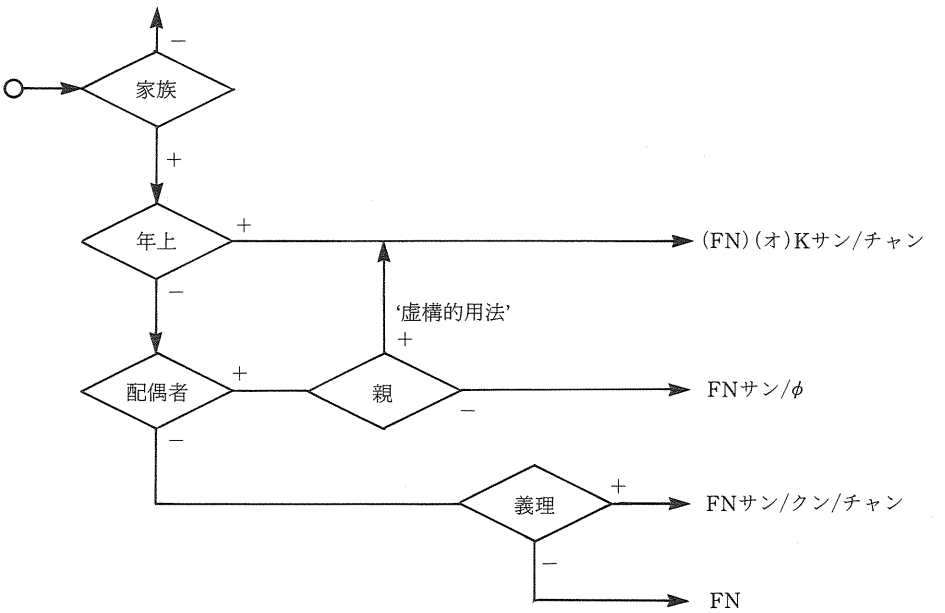
表2　マスオ、ノリスケの職場

	部　長	マスオ	アナゴ
部　長		フグタくん	(アナゴくん)
マスオ	部　長		アナゴくん
アナゴ	(部長)	フグタくん	

＊(　)内は未確認だが期待される語形

4)　この種の現象の裏には（暗黙のうちに了解されている）夫婦間の上下関係があると解釈する立場もある（寿岳，遠藤など）。筆者はサザエさん夫婦くらいの世代の日本語においては ‘女性らしさ’ を出すための女性特有の「美化語」表現の一種だと考えている。

図1　サザエさん一家

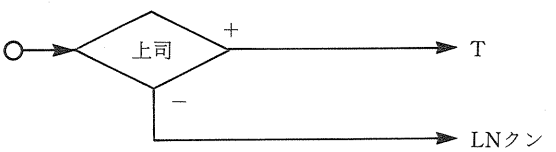


2.2.　マスオ，ノリスケの職場

マスオの職場で登場するのは同僚のアナゴ，それに上司である部長がたまに出る。またノリスケの方は編集長くらいのものである。

得られた資料によれば，両職場とも上司か部下により呼称が異なっており，下図のような図にまとめられる。

図2　マスオ、ノリスケの職場



ただしこれは同ランクにあるマスオとアナゴの間の呼称（LN クン）と上司から部下に与えられるものが一致しているから図2のような簡単な図で済んだわけだが，現実には同じランクであっても男性もいれば女性もいるし，先輩もいれば後輩もいる。国立国語研究所(1982) を参考にしながらより一般的なルールを述べると

(1)　上司（役職）に対してはTベース。女性の呼びかけ手にはTサンも見受けられる。

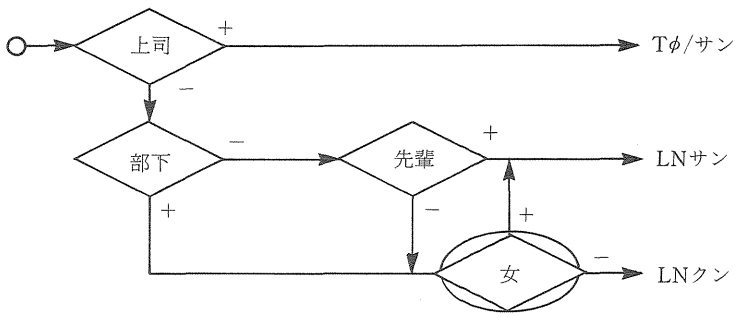
(2)　部下に対しては LN ベース。男性の部下なら LN クン，女性なら LN サン。上司が女性の場合は部下の性に関係なく LN サンが多い。

(3)　同ランクの場合には LN ベース。先輩に対しては性別に関係なく LN サン。同，後輩に対しては男同士の場合に LN クン，それ以外は LN サン。なお，男同士で非常に親しい相手に対しては LN もありうる。ただしこれは相手の属性ではなく，呼びかけ手の側の心理的レベルに関わることであるのでまとめのチャート図には反映させない。

2.3.

『サザエさん』を資料に日本語における呼びかけ語の用法を記述してきたが，ここでこれまでの考察からわかった事実を箇条書きにしてまとめておく。

図 2　職　場



＊◯の中は呼びかける側（addresser）の属性

1)　日本人には“目上・目下意識”が明瞭にあり，その言語的現れとして呼びかけ語の場合に，目上に対してはK，Tベースで呼び，目下に対してはFN，LNベースで呼ぶという区別につながっている。つまり目上にはその人固有の名前では呼べないということである。またK，Tは‘非相互的’（Kをもらう人は相手にKを与えずFNを与え，Tをもらう人は相手にTを与えずLNを与える）であるのに対し，FN，LNは‘相互的’（お互いにFN，LNで呼び合う）でありうるということも重要なことである。

2)　日本人には“うち，そと意識”があり，血縁関係の有る無しがその大きな目安である。K，FNはうち意識の相手に，T，LNはそと意識の相手に与えられる。ただし，この次元は流動的な部分もあり，うち意識は仲間意識ともつながることから，たとえ他人であっても親しさの度合が増せばLN→FN，T→LNに変わったりする。例えば前者は仲良しになった女子学生同士がFNで呼び始めたり，恋人同士になった男女がLNからFNへ移行したりする。夫婦になればもちろんFNである。また後者は，係長と係員といったようなそれ程ランクに差のない者同士で目下が目上をLNで呼ぶことがある。以上のことを図3に示しておく。

図 3　対人意識とK，T，FN，LN

		目上意識 +	目上意識 −
うち意識	+	K	FN
	−	T	LN

3)　敬称，愛称はK，T，FN，LNなどに添えられて図3で示したこの4者の特性にさらに詳かなニュアンスを与える。これについてはLoveday（同上）にも議論されておりここでは立入らない。ただ－サンが女性の方により結びついたものであり，その分男性には－クンや－φが関わっていることを指摘しておく。

3.　む　す　び

『サザエさん』は話しことばの面ですぐれた日本語教育教材になりうると同時に，日本人，日本文化を理解する上でも貴重な材料を提供している。小論では『サザエさん』に豊富に出てくる呼びかけ語の使用実態を明らか

にし，それを通してその裏にある日本人の対人意識を考察した。呼びかけ語は待遇表現と言われるもののほんの一部ではあるが，待遇表現という外国人には一般に難しいとされる現象を理解する上でこの上ない分析材料を与えてくれるように思う。今後は『サザエさん』に現れている他の場面，例えば“近所づき合い”や“カツオの学校”などにも図を転じ，より包括的な考察へと進めて行きたい。

引用文献

井出祥子　1982「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座』第5巻　大修館

遠藤織枝　1987『気になる言葉——日本語再検討』南雲堂

久野　暲　1977「英語圏における敬語」『岩波講座　日本語4　敬語』岩波書店

寿岳章子　1979『日本語と女』岩波新書

鈴木孝夫　1973『ことばと文化』岩波新書

Ishikawa A. et al., 1981 Address terms in modern Japanese: a sociolinguistic analysis, *Sophia Linguistica*, Tokyo.

Friederike Braun, 1988 *Terms of Address,* mouton de gruyter.

Leo Loveday, 1986 *Japanese Sociolinguistics,* John Benjamins.

Roger Brown & Albert Gilman, 1960 The Pronouns of Power and Solidarity, *Style in Language*, Thomas A Sebeok (ed.) MIT Press.

S. M. Ervin-Tripp, 1969 Sociolinguistics, in L. Berkowitq (ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 4.

Japanese Address Terms in “Sazae-san”

Masataka Jinnouchi

An analysis concerning the address terms of Japanese is made by examining their usages in “Sazae-san”, a TV program where we can find plenty of examples of modern Japanese. It reveals the following sociolinguistic rules on how to address others.

(1) The Japanese makes a distinction between superiors and inferiors. As the reflection of this fact, k (kinship terms) and T (titles) are used for the former, FN (first name) and LN (last name) for the latter. Furthermore, K and T are used non-reciprocally, that is, those who give K (T) to the addressee receive FN (LN), while between equals FN and LN can be used reciprocally.

(2) The Japanese also makes a distinction between in-group membership and out-group one. An important criterion for the distinction is the relationship. K and FN are used for the in-group members, T and LN for the out-group ones.

Nevertheless, when the intimacy increases in the dyad, T can be replaced by LN in (1), LN by FN in (2) resulting in the reciprocal usage in both cases.